— 4 —

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンとサーグッド・マーシャル

人種隔離制度に対する法的な挑戦の開始

1956年11月、アラバマ州モントゴメリーでは、バスの人種隔離制に抗議する黒人たちのバス・ボイコットが12カ月目に入っていた。その1年前、ローザ・パークスという黒人女性が市バスで白人優先の前部座席を白人男性に譲ることを拒否し、この勇気ある行動が政治運動に発展して、勇敢かつダイナミックな指導者マーティン・ルーサー・キング・ジュニア師の存在が米国民に知られるようになっていた。しかし、モントゴメリーの市当局がようやく譲歩してボイコットが成功したのは、裁判でアフリカ系米国人を強制的にバスの後部座席に座らせるのは違法であるとの判決が下されたためであった。歴史家のケビン・マムフォードは、「憲法に基づく正当性と法廷による保護がなければ、各地で抗議をする黒人たちは州および地方政府によって鎮圧され、人種差別主義者が容易に勝利を収めることができただろう」と書いている。

米国では、20世紀半ばにキングらの主導で社会正義を求めた活動を公民権運動と呼ぶことが多い。しかし、これまで述べてきたように、アフリカ系米国人とその支持者たちは、合衆国憲法および南北戦争後の憲法修正条項によって約束された権利を獲得するため、すでに長年にわたる闘いを続けていた。また近代公民権運動には2本の柱があったことを理解することも重要である。そのひとつは、非暴力による勇気ある抵抗運動であり、そうした活動が米国民に、同胞である黒人に対して恥ずべき扱いをしていることをようやく直視させたのである。そして、もう1本の柱は、チャールズ・ハミルトン・ヒューストンとその最も偉大な弟子サーグッド・マーシャルをはじめとする弁護士たちであり、彼らの尽力により、抵抗運動は最も強い力、すなわち国家の法律を味方に付けることができた。

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンは、優れた訴訟者、法学教育者として、「ジム・クロウ」法に対する法的な攻撃を始めた。

1956年にマーシャルは、彼が過去に勝利を収めた判例を使ってモントゴメリーの黒人たちを弁護した。最も有名な判例は「ブラウン対教育委員会」であったが、それ以前にもヒューストンとマーシャルがパートナーとなって、米国南部におけるジム・クロウ人種隔離制度の法的枠組みの多くを解体していたのである。

チャールズ・ハミルトン・ヒューストン ジム・クロウを抹殺した男

チャールズ・ハミルトン・ヒューストンは、1895年にワシントンDCで生まれた。成績優秀な彼は19歳のときアマースト大学を総代で卒業し、すぐに人種隔離されていた米軍の黒人部隊に入隊して第1次世界大戦を戦った。軍隊で人種差別を体験したヒューストンは、公民権を求める闘いを生涯の仕事とすることを決意した。帰還後、ハーバード大学で法律を学び、アフリカ系米国人として初めて同大学の権威ある法律誌の編集者を務めた。そして、ハーバードで法律博士号、スペインのマドリード大学で民法学博士号を取得した。

ヒューストンは、弁護士の正しい使命は正義を確実に実現する手段として法律を使いこなすことであると考えており、「弁護士は、社会工学者であるか、または社会の寄生虫であるかのどちらかである」と述べている。1924年にはワシントンDCにあるハワード大学法律大学院の非常勤講師となった。当時のアフリカ系米国人現役弁護士の4分の3が同大学院の卒業生だったとも言われている。そして1929年までには同大学院の学長になっていた。

ヒューストンはわずか6年の間にアフリカ系米国人法学生の教育を根本的に改善し、ハワード大学法律大学院を完全認定校とし、公民権法を専門とする大勢の弁護士を育成した。ジョージ・R・メトカーフは、著書『Black Profiles』で、

ヒューストンがハワード大学の仕事を引き受けたのは、ハワードを「ニグロ指導層のウエストポイント（米陸軍士官学校）」のような存在とし、「それによってニグロたちが法廷で人種差別と闘い、平等を獲得できるようにする」ためであった、と書いている。

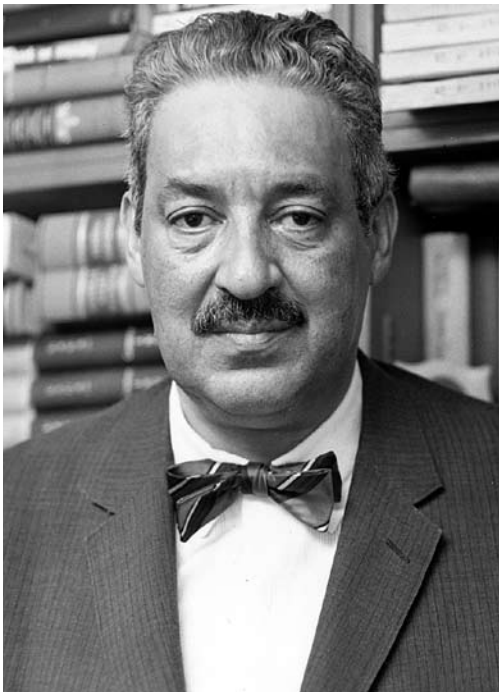
一方で、全米有色人種地位向上協会(NAACP)は、1896年の最高裁によるプレッシー判決で認められた「分離すれど平等」の原則に法的に挑戦するための基礎作りをしていた。ヒューストンの推薦に従って、元連邦検事のネーサン・ロス・マーゴルドに、南部における「分離すれど平等」の原則の実態調査を依頼した。マーゴルドは1931年に、リーガルサイズ218ページに及ぶレポートを完成させた。そのレポートは、白人用と黒人用に分かれた学校の間には州からの資金に極めて大きな差のある悲惨な状況を実証していた。

1934年に、ヒューストンはNAACPの特別弁護人となった。そして、ジェームズ・ネブリット、スポッツウッド・ロビンソン3世、A・リオン・ヒギンボサム、ロバート・カーター、ウィリアム・ヘイスティー、ジョージ・E・C・ヘイズ、ジャック・グリーンバーグ、オリバー・ヒルなど、主にハワード大学で学んだ若い優秀な弁護士たちを集めた。ヒューストンは、若い弟子サーグッド・マーシャルと共に、カメラとポータブル・タイプライターを携えて南部各地を訪問し始めた。後にマーシャルは、ヒューストンの車で共に旅をしたときのことを回顧している。「食べる場所も寝る場所もなかった。わたしたちは車の中で寝て、果物を食べた」 これは危険の伴う活動でもあったが、ヒューストンが集めた視覚的な記録と、マーゴルドが収集したデータは、新たな法的戦略の基礎となった。すなわち、黒人に与えられる施設が白人に与えられる施設と平等でなければ、これらの人種差別州はプレッシー判決の基準すら満たしていない、とヒューストンは論じた。「分離すれど平等」ならば、必然的に、これらの州は、膨大な予算を投じて黒人用の施設を大幅に改善するか、または人種差別を廃止するしかなかった。

平等を目指すこの戦略は、1935年にメリーランド州で「マレー対ピアソン」事件におけるヒューストンとマーシャルの勝利という形で実を結んだ。この訴訟では、アフリカ系米国人の原告が、人種差別によりメリーランド大学法律大学院の入学を拒否されたとして訴えていた。大学側の弁護団は、黒人の入学志願者で有資格の者には州外の法律大学院に入るための奨学金を提供することによって、「分離すれど平等」の基準を満たしている、と主張した。州の裁判所はこの主張を退けた。法廷は、公立学校の人種隔離を違法とするには至らなかったが、メリーランド大学の提供する州外の大学への奨学金という選択肢は機会の均等ではない、と判断した。メリーランド大学法律大学院は、有資格のアフリカ系米国人学生の入学を認めるよう命じられた。同大学院に入学を拒否された有資格の黒人の一人と自認していたマーシャルにとって、この勝利はことさらに喜ばしいものであった。

ヒューストンは健康を損ねて1940年にNAACPの職を引退し、1950年に死去した。後にマーシャルは、「われわれが今日あるのはすべてチャーリーのおかげである」と述べた。ヒューストンの愛弟子だったマーシャルが人種差別制度に対

有資格の黒人学生の入学を拒否したメリーランド大学法律大学院の方針を違法とする訴訟で、原告ドナルド・ゲインズ・マレー（中）の弁護士を務めたサーグッド・マーシャル（左）とチャールズ・ハミルトン・ヒューストン



1962年、連邦控訴裁判所判事に指名され、上院の承認を得た後のサーグッド・マーシャル。1967年には、リンドン・B・ジョンソン大統領が、マーシャルを初のアフリカ系米国人最高裁判所判事に指名した。

する最後の法的な闘いを主導することになるが、その戦略を生み出し、道を切り開いたのは、マーシャルの師ヒューストンであった。

サーグッド・マーシャル―「ミスター公民権」

「わが国を人種差別の荒野から脱出させる上で、サーグッド・マーシャルほど大きく貢献した人物はいない」と述べたのは、マーシャルの同僚だったルイス・パウエル最高裁判事である。マーシャルは、1908年に生まれ、メリーランド州ボルティモア市の人種隔離された中等学校で教育を受けた後、リンカーン大学に入学した。同大学は、「アフリカ系の若者に人文科学の高等教育を授けるために設立された世界初の教育機関」であった。白人専用のメリーランド大学法律大学院からは入学を拒否されることが分かっていたため、マーシャルはハワード大学法律大学院に入学し、ボルティモアからワシントンＤＣまで長い時間をかけて通学した。マーシャルの母親は、結婚指輪と婚約指輪を売って息子の学費を捻出（ねんしゅつ）した。学業に秀でていたマーシャルは、1933年に首席で卒業し、チャールズ・ハミルトン・ヒューストンに高く評価された。

マーシャルは弁護士としてヒューストンと緊密に協力し、前出の「マレー対ピアソン」事件で勝利を収めた後に、NAACPの専属弁護士となった。1938年には、ヒューストンの後任としてNAACP法務委員会の委員長となり、さらに1940年にはNAACPの「法廷弁護基金」の初代理事長となった。

これは的確な人選であった。マーシャルは比類のない多くの才能を兼ね備えていたからである。後にユナイテッド・プレス・インターナショナル（ＵＰＩ）通信社は、マーシャルについて次のように述べている。

> （前略）並み外れた細部への注意力と目標への粘り強い集中心を持つ極めて優秀な戦術家であり、しばしば、部屋の中で一番よく響くと言われた太い声の持ち主でもあった。それと同時に、その人柄は極めて魅力的であり、どんなに頑固な人種差別主義者の南部の保安官でさえも、彼の話や冗談に引き込まれずにはいられなかった。

好感を持たれる人柄と優秀な技能という強力な武器を兼ね備えたサーグッド・マーシャルは、1946年には、暴動の罪で告訴された黒人25人を弁護し、白人だけの南部の陪審団を説得して無罪判決を勝ち取った。しかし、ジム・クロウ下の南部で自分の意見をはっきりと主張する黒人が皆そうであったように、マーシャルも何度かかろうじて暴力から逃れるという体験をした。

ヒューストンの始めた漸進主義の法的な戦略が、マーシャルの下でようやく成功を収めるようになった。訴訟１件ごとに、マーシャルとNAACPの弁護士たちは、人種差別制度を支える法的な柱を少しずつ崩していった。マーシャルは、最高裁で弁護をした訴訟32件中29件で勝利を収めるという驚異的な実績を上げた。彼の弁護で勝訴した事件には次のようなものがある。

● スミス対オールライト（1944年）。政党が本選挙の候補者を選ぶ予備選挙を、白人のみによるものとすることを、最高裁が禁止。マーシャルの伝記の著者フアン・ウィリアムズによると、マーシャルはこの勝訴を最も重要な勝利と考えた。「人種差別主義者は（候補者に党の指名を得るために人種差別を支持することを要求し）、黒人やヒスパニック、そして（中略）時には女性ですら、本選挙で投票する段階では、人種差別主義者の候補者ばかりで、選択の余地がなかった」

● モーガン対バージニア州（1946年）。マーシャルはこの裁判で、州間バス路線における人種隔離を禁止する最高裁の判決を勝ち取った。後に「ボイントン対バージニア州」事件（1960年）では、州間を移動する乗客のためのバス・ターミナルなどの施設の人種隔離を廃止する判決を勝ち取った。これらの訴訟が、1960年代のフリーダム・ライド運動につながった。

● パットン対ミシシッピ州（1947年）。アフリカ系米国人を組織的に排除した陪審団はアフリカ系米国人の被告を有罪とすることはできない、というマーシャルの主張を最高裁が認めた。

● シェリー対クレーマー（1948年）。マーシャルは、人種制限特約のある不動産でも、州裁判所がその不動産の黒人への売却を差し止めることは違憲である、との最高裁判決を勝ち取った。こうした特約は、住宅所有者が不動産を黒人、ユダヤ人、およびその他の少数民族に売ることを防ぐための法的戦術として広く使われていた。

施設が不平等であれば裁判所は「分離すれど平等」の制度を覆すということが、こうしたNAACPチームの勝利によっ

The Price of the AFRO Is 7 Cents In D.C.—Pay No More

WASHINGTON AFRO AMERICAN

JC Bus Travel Outlawed

Supreme Court Votes 6-1 in Morgan Case

Jurists Rule State Laws Place Undue Burden on Interstate Travel

Her Fight Ends Bus Jim Crow

Pickets March in Protest; Choir Sings

U. S. Sues Klan for Unpaid Taxes

the week

Hundreds Ignore Line to Hear Tuskegee Concert

Cases of Bus Jim Crow Show Barbarity of Policy

連邦法は州法に比べ、アフリカ系米国人に対してより大きな保護を与えることが多かったが、主として「州際」的な状況でしか適用されなかった。ローザ・パークスより何年も前に、アイリーン・モーガンが、州の境界を越える路線のバスで、座席を譲ることを拒否した。サーグッド・マーシャルの弁護でモーガンは勝訴し、これによって州間バス路線では人種隔離が法的に禁止された。

上　人種隔離されていたアーカンソー州リトルロックのセントラル高校で初めての黒人生徒5人が無事入学できるように、ドワイト・D・アイゼンハワー大統領は連邦軍を派遣した。

右下　話し合いをするマーティン・ルーサー・キング・ジュニア師、フレッド・シャトルスワース師、およびラルフ・アバナシー師

左下　前進のしるし。1956年、ノースカロライナ州グリーンズボロのバスから、ジム・クロウ制度の規則の表示が除去された。

て立証された。これは大きな業績ではあったが、特に教育に関しては、幅広い改革をもたらすための最良の手段ではなかった。南部の何百もの学校区のすべてで、貧しいアフリカ系米国人が黒人の学校と白人の学校を比較して訴訟を起こすことは期待できなかった。サウスカロライナ州クラレンドン郡では、1949～1950年の学年度の教育支出が白人の生徒一人当たり平均179ドルであったのに対し、黒人の生徒は一人当たりわずか43ドルであった。このような格差を一挙になくすには、人種隔離制度そのものを直接廃止する判決を勝ち取るしかなかった。マーシャルは、「世紀の判決」と言われる「ブラウン対教育委員会」事件で、その直接的判決を勝ち取ることに成功した。

ブラウン判決

カンザス州トピカの小学生リンダ・ブラウンの父親オリバー・ブラウン牧師が原告として適切な素質を備えている、とマーシャルが判断したことから、ブラウン事件が形を取り始めた。ブラウン家からわずか7ブロックのところに白人の学校があるにもかかわらず、リンダは21ブロック離れた黒人の学校に通わなければならなかった。ブラウンは裁判で訴えたが、カンザス州の裁判所は、人種によって分離された黒人学校と白人学校は質において同等であるとしてブラウンの訴えを退けていた。これによって、最高裁は最終的に、人種によって分離された施設は本質的にも法的にも不平等であり、従って違憲であるという判決を下さなければならない、と主張する機会がマーシャルに与えられた。

マーシャルの法的な戦略は、社会科学的な証拠をよりどころとしていた。NAACP法廷弁護基金は、歴史学、経済学、政治学、および心理学の各分野の専門家から成るチームを結成。中でも特に重要な研究は、心理学者のケネス・クラークとメイミー・クラークによる、人種隔離制度がアフリカ系米国人の自尊心と精神衛生に及ぼす影響に関するものであった。その研究結果は痛ましいものであり、例えば3歳から7歳までの黒人の子どもたちは、肌の色が違うだけでその他の点ではまったく同じ白人と黒人の人形を見せられると、白人の人形の方を好んだ。

1954年5月17日、最高裁は全員一致で、マーシャルの戦略が正しかったことを証明した。すなわち、原告が提出したクラークらの研究論文に基づき、次のように決定的な判定を下したのである。

> （前略）公共教育の分野において「分離すれど平等」の原則が存在する余地はない。教育施設の分離は、それ自体が不平等である。従って、われわれは、原告らおよびその他同様の状況にある者は、（中略）告訴の対象となっている人種隔離が原因で、修正第14条によって保証された法による平等な保護を奪われたものと考える。

オックスフォード大学教育政策円卓会議の一人で教育専門の弁護士であるデリル・W・ウィンは、ブラウン判決の意義について次のように述べている。

> この判決では、国家の最高裁判所が、それまでの米国の黒人に対する扱いが間違っていた、と述べたのであった。（中略）わたしの父は判決当時10代の少年だったが、その父が、この判決によって自分も重要な人間なのだと思うことができた、と後に語っていたのをわたしは覚えている。（中略）個人的なレベルでは、ブラウン判決の真の遺産は、子どもたちすべてが、わたしたちすべてが重要な人間なのだということを常に思い出させてくれる、という事実である。

最高裁は学校の人種隔離を廃止する期限を具体的には指定しなかったが、翌年、総合して「ブラウンⅡ」事件と呼ばれているいくつかの訴訟によって、マーシャルと同僚の弁護士たちは、人種隔離の廃止を「時間をかけて慎重に」進めるとする、という最高裁の裁定を引き出した。

それでもなお、南部の各地で抵抗が続いた。1957年9月、アーカンソー州リトルロックのセントラル高校で、黒人の生徒たちが力ずくで登校を阻止され、マーシャルは同市へ飛んで連邦裁判所に提訴した。この訴訟でマーシャルが勝利を収めたことが発端となり、9月24日にドワイト・アイゼンハワー大統領は、次のように宣言した。「本日わたしは、アーカンソー州リトルロックで連邦法の執行を支援するために連邦政府の権限で軍隊を出動させる大統領令を発行した。（中略）わが国の裁判所の判決より暴徒の支配が優先されることを許してはならない」

ブラウン事件、リトルロック事件、その他のNAACPチームの法的な勝利は、「法律面からの」公民権運動の威力と限界の両方を表すものであった。何十年もの間、人種隔離された劣等な学校に追いやられていた米国の黒人たちにとっては、リトルロックで、また1962年のミシシッピ大学で、そして1963年のアラバマ大学で、黒人の学生たちが連邦軍兵士に護衛されて白人専用だった学校の教室に入る光景は、ほとんど想像もできないものだったかもしれない。しかし、訴訟戦略は、徐々に、訴訟1件ごとに効果を上げていった。

一方で、南部のほとんどの地域では、多くの学校だけでなく、プールからバス、映画館、軽食堂に至るまで、ほぼあらゆる種類の公共施設で、法的な人種隔離が依然として幅を利かせていた。そして、人種差別主義者が、憲法で定められたアフリカ系米国人の最も基本的な権利を奪うという例が頻繁に起こっていた。不公正な細則や、あからさまな不正や詐欺、そして最終的には暴力の威嚇などの組み合わせによって、修正第15条の明白な規定が覆され、南部の黒人は投票をすることができなかった。

新しい公民権法が必要とされていることは明らかであった。そうした法律を可決させるには、連邦議会の南部出身議員による強硬な反対を押し切るだけの強力な政治的コンセンサスが必要であった。サーグッド・マーシャルは、1961年から1965年までは連邦控訴裁判所（全米で2番目に権威のある連邦裁判所）の判事として、そして1967年から1991年までの四半世紀は米国初のアフリカ系米国人最高裁判事として、引き続きこうした法的な闘いの先頭に立った。

同時に、新たな政治的な公民権運動が形成されつつあった。勇敢なアフリカ系米国人たちが、あらゆる人種や信条の人たちと提携して、米国人として与えられている公民権の全面的な獲得を、断固として、しかし平和的に要求し始めた。彼らは同胞である米国民に、人種隔離と人種的抑圧の許し難い現実と正面から向き合うことを余儀なくした。その結果として、国民の感情が変化し、政治的な力の均衡も変わっていった。そして、1955年12月のある日の夕方、アラバマ州モントゴメリーで、長い1日の仕事に疲れた42歳の裁縫師ローザ・パークスが、人種によって分離されたバスの座席を譲ることを拒否したことから、大きな変化の動きが始まったのである。

ラルフ・ジョンソン・バンチ
学者として、政治家として

アフリカ系米国人が公民権を求めて闘っている最中にも、個々のアフリカ系米国人の業績がこの闘争の正当性を実証していた。ノーベル賞を受賞した学者で外交官でもあったラルフ・バンチは、偏見を抱かない人々に対して、黒人が米国社会に全面的に貢献できるということを証明した。

ラルフ・バンチは、1903年8月7日にミシガン州デトロイトで生まれた。父親は巡回理容師、母親は主婦でアマチュア・ピアニストでもあった。父親は家庭を捨て、母親はバンチが14歳のときに亡くなった。その後バンチは、カリフォルニア州ロサンゼルスで母方の祖母と暮らした。この祖母の英知と気骨がバンチに大きな影響を与えた。彼はカリフォルニア大学ロサンゼルス校を首席で卒業し、奨学金を得てハーバード大学大学院に進んだ。

1950年ノーベル平和賞を受賞する米国の調停者で外交官のラルフ・J・バンチ博士

バンチは子どものころから人種差別を強く意識しており、差別と闘う決意を固めていた。植民地時代のアフリカを研究した彼は、植民地主義と米国の人種差別には多くの共通点があると考えるようになり、その両方をなくすことに尽力しようと決心した。

バンチはワシントンDCの伝統ある黒人大学ハワード大学に政治学部を設立した。執筆した人種差別に関する多くの論文は、後に米国の公民権運動の基礎的な文献となった。またバンチは、米国における植民地主義研究の草分けでもあった。そして、米国の人種間問題に関する1944年の画期的な研究書『An American Dilemma』を著したスウェーデンの社会経済学者グンナー・ミュルダールの主な共同研究者であり共著者であった。「ブラウン対教育委員会」事件で、最高裁は『An American Dilemma』を肯定的に引用した。

第2次世界大戦の開戦が迫る中で、バンチは米国政府のアフリカ担当顧問に選ばれ、続いて国務省に異動して、後の国際連合憲章に関する作業に従事した。国務省初の黒人幹部であった。1945年のサンフランシスコ会議では国連憲章のうち非自治地域（植民地）および信託統治に関する2つの章を起草した。これらの章は、戦後の非植民地化を加速する根拠となった。バンチは、植民地の独立を現実化することに最も貢献した一人であった。

新たに結成された国際連合で、バンチは信託統治制度を設立。国連事務局の一員としても並はずれた実績を上げた。1947年には国連パレスチナ特別委員会の書記として、多数派意見の分割案だけでなく、少数派意見の連邦国家案も執筆した。分割案は国連総会で採択され、今日に至るまで中東における調停担当者の基本目標となっている。

1948年5月に英国がパレスチナから撤退し、委任統治領パレスチナの国連総会で指定された場所でユダヤ人がイスラエル建国を宣言し、アラブ5カ国がこの新しい国家に侵攻した。国連安全保障理事会は、フォルケ・ベルナドッテ伯爵を調停委員に任命し、バンチは彼の主任顧問となった。調停により、パレスチナで停戦が実現し、バンチは国連軍事監視団を組織して停戦を監督させた。これが国連による平和維持活動の萌芽となった。1948年9月に、エルサレムでベルナドッテがスターン・ギャング（シオニストの武装地下組織。バンチおよびシオニスト主流派はこの組織を糾弾していた）に暗殺され、バンチが調停委員となった。1949年1月、バンチは、エジプトとイスラエルを皮切りに休戦交渉を開始した。イスラエルと、その近隣のアラブ4カ国との間で休戦協定が結ばれ、戦争停止のための正式な基盤が作られた。1950年にバンチは、これらの功績に対してノーベル平和賞を授けられた。

1953年、スウェーデンのダグ・ハマーショルドが国連事務総長に就任した。事務次長だったバンチは、ハマーショルドに最も近い政策顧問となった。1956年に、エジプトがスエズ運河を国営化すると、英国、フランス、およびイスラエルがエジプトに侵攻した。この無分別な行動は世界に衝撃を与えた。カナダのレスター・ピアソンは、侵略軍をエジプトから撤退させるには全く新しい手段、すなわち国連の「平和・警察部隊」が必要であると主張して、こうした部隊の設置を提案した。ハマーショルドは、できる限り早急にこの部隊を結成し配備することをバンチに依頼した。ソビエト連邦による介入の脅威があったことも緊急性を高めていた。米国をはじめ多くの諸国の熱心な支持を得て、バンチは昼夜を分かたず作業に取り組み、国連総会の要請を受けてからわずか8日後に国連緊急軍を結成し、エジプトに配備した。

国際平和維持活動の草分けとなったことは、バンチ自身が最も誇りとした業績であった。1960年にも、2万人以上から成る国連平和維持部隊をコンゴに派遣し、また1964年には、キプロスで同様の部隊を結成するに当たり主導的役割を果した。ハマーショルドがアフリカでの飛行機事故で死去した後、バンチは、後任のウ・タント事務総長（ビルマ）にとっても顧問として不可欠な存在となった。バンチが公民権運動に全力を注ぐために国連を引退しようとしたときには、ウ・タントが懇願して引き留めたほどである。バンチは、1971年12月9日、仕事による過労と糖尿病で死去した。

ラルフ・バンチは、物事を成し遂げることには非常に熱心だったが、個人的な名声にはほとんど関心がなかった。（ノーベル平和賞を辞退しようとさえした。）バンチの数々の偉大な業績の成果は人々の記憶に留められているが、その際に彼自身が果たした役割はほとんど知られていない。旧植民地世界から解放された何百万ものアフリカ系米国人、そして国際連合自体がバンチに負うところは特に大きい。彼は、公務に生涯を捧げた20世紀有数の偉人であった。

ブライアン・アークハート
アークハートは元国連事務次長。著書に『Hammarskjold』『A Life in Peace and War』『Ralph Bunche-An American Odyssey』などの歴史研究書がある。

ジャッキー・ロビンソン
人種の壁を破る

ブルックリン・ドジャースが、ペンシルベニア州フィラデルフィアのシャイブ球場に乗り込んだとき、チームには、新たな論争の的となる存在が加わっていた。ジャッキー・ロビンソンという黒人選手である。観衆は敵意を象徴する物をグラウンドに投げ入れ、ホームチームのベンチからは差別に満ちた言葉が投げ付けられた。ドジャースの投手としてその場にいたラルフ・ブランカは「フィラデルフィアは最悪でした」と語っている。「観衆は黒猫やスイカをグラウンドに投げ込み、フィラデルフィアの監督ベン・チャップマンはジャッキーに激しいヤジを浴びせました」

それは1947年の米国であり、当時の国民の多くにとって、米国はまだ黒と白の2つに分離されていた。南部の人々をはじめ米国民の中には、肌の色が違うというだけで憎悪を募らせる人たちがいた。彼らから見ると、黒人には白人と平等の公民権を与えられる資格がなかった。そしてそれは野球の世界にも及び、20世紀に入る前から、球界の幹部やチームのオーナーの間では、大リーグ選手は白人に限るという非公式かつ暗黙のルールができ上がっていた。黒人選手は、黒人だけのニグロ・リーグに入るしかなかった。

しかし、1947年4月15日、多様な人種から成るニューヨーク市ブルックリン区を本拠地とするチームの内野手として、ロビンソンが人種の壁を破って大リーグに登場。平等の概念を浸透させる長い道のりの大きな第一歩として、スポーツの世界を超えた先駆的シンボルとなった。チームメートのブランカは、ロビンソンの業績が野球のダイヤモンドを超えたものであったことについて、次のように述べている。

> わたしは、これが野球を変えたと何度も言っていますが、それだけではなく、これはこの国をも変え、最終的には世界をも変えました。（中略）ジャッキーは、ローザ・パークスのために道を切り開き、マーティン・ルーサー・キング・ジュニ

上　1952年ワールドシリーズ第1試合でニューヨーク・ヤンキースを破り、勝利を祝うブルックリン・ドジャースのジャッキー・ロビンソン（前列右）、ジョー・ブラック（後列左）、デューク・スナイダー（前列左）、ピーウィー・リース（後列右）、およびチャック・ドレッセン監督（中央）

下　1963年、アラバマ州バーミングハムで、公民権運動の指導者ラルフ・D・アバナシーおよびマーティン・ルーサー・キング・ジュニアと会見するジャッキー・ロビンソン（右）とボクシングの元ヘビー級チャンピオン、フロイド・パターソン（左）

アのために道を切り開き、そして、人種の平等を求めるすべての黒人指導者のために道を切り開きました。それは、黒人に対する米国全体の見方を変えた出来事でした。

それはチーム内でも同じでした。チームには、黒人を見下す習慣の中で育った南部出身の選手たちもいました。彼ら（アフリカ系米国人）は、バスの後部座席に座らなければならず、白人と同じ水飲み場で水を飲むことができず、同じトイレを使うことができませんでした。しかし彼ら（白人選手たち）は徐々に考え方を変えていきました。

ロビンソンは、1919年1月31日、ジョージア州カイロで生まれ、カリフォルニア州パサデナで育った。近くのカリフォルニア大学ロサンゼルス校に進み、在学中は、野球、フットボール、バスケットボール、陸上の4つのスポーツで優れた才能を発揮した。1942年に徴兵されて軍隊に入ったが、当時米国の軍隊ではまだ人種隔離が行われていた。（ハリー・S・トルーマン大統領が1948年に軍隊の人種隔離廃止を命じた。）誇り高いロビンソンは、バスの後部に座ることを拒否し、不服従の罪で軍事裁判にかけられたが、無罪判決を受け、名誉除隊となった。「夫は行動の人でした。わたしたちの置かれた状況に甘んじようとはしませんでした」と未亡人のレイチェル・ロビンソンは語っている。

そのころ、ブルックリン・ドジャースのゼネラルマネージャー、ブランチ・リッキーは、国民的スポーツの野球において人種差別を廃止する時期が来たと考えていた。その大きな理由のひとつは、アフリカ系米国人選手を採用することによってチームの競争力を強化できることであった。黒人選手が他の選手やファンから人種差別的なヤジを浴び、時にはそれ以上のひどい扱いを受けることは避けられず、それに耐えられる強い精神力と勇気を備えた人物が必要であることをリッキーは理解していた。そして1945年に、ニグロ・リーグのカンザスシティーのチームにいたロビンソンをスカウトし、彼こそが求めていた選手であり人物である、と判断した。

ロビンソンは、次のシーズンをモントリオールのドジャースのマイナーリーグ・チームで過ごし、1947年のシーズンには大リーグに昇格した。黒人選手第1号としての立場は容易なものではなかった。リッキーはロビンソンに、向こう3年間は各地のファンや相手チームから浴びせられる侮辱的な言葉に反応しないことを約束させた。後にも先にも、他のいかなる選手も経験したことのない重圧の下で、ロビンソンは試合で大活躍をした。

大リーガーとしての初シーズン、28歳のロビンソンは1塁を守り、打率2割9分7厘を上げた。ダイナミックなプレーでも知られ、29盗塁でナショナル・リーグの盗塁王となるとともに、同リーグの最優秀新人賞を受賞し、チームのワールドシリーズ進出に貢献した。他のチームも、ドジャースがロビンソンの存在によって優位に立ったことを認め、自分たちも黒人選手を入団させるようになった。ロビンソンは、最も優れた成績を上げた1949年のシーズンには、2塁手として、打率3割4分2厘、16本塁打、124打点、37盗塁で、ナショナル・リーグの最優秀選手となった。

ロビンソンは、ドジャースで10シーズンを過ごし、ワールドシリーズに6回出場し、1955年にはブルックリン・ドジャースの最初で最後のワールドシリーズ優勝を体験した。その次のシーズン終了後、オールスター戦出場6回を誇るロビンソンは、ライバルのニューヨーク・ジャイアンツへのトレードを拒否して引退した。1962年、ロビンソンは黒人選手として初めて野球殿堂入りを果たした。

選手生活を終えた後も、ロビンソンは人種の平等を求める闘いを続け、公民権を主張し、公民権運動の指導者たちや団体を支援した。その一環として、彼は全米有色人種地位向上協会(NAACP)の理事も務めた。

ジャッキー・ロビンソンは、1972年に心臓マヒで死去した。53歳であった。その53年間に、ロビンソンは何百万もの人々に影響を与えた。偏見を持つ者を恥入らせ、アフリカ系米国人を鼓舞し、衰えを知らぬ回復力と尊厳の模範を示すことによって、米国のあらゆる国民の心を動かし、アフリカ系米国人の公民権を認めさせた。

ロビンソン自身、「人生は、他人の人生に影響を与えることができなければ意味がない」と述べている。

ブライアン・ヘイマント
ニューヨーク州ホワイトプレーンズのザ・ジャーナル・ニュース紙のスポーツ記者ブライアン・ヘイマンは、30を超えるジャーナリズム賞を受賞している。